

「霏霰」新考

はじめに

『萬葉集』の中には七十例以上の「たなびく」が見られる。それらには「多奈妣久」のような音仮名表記が多いが、「被」(卷十一、二四二、二六)、「蒙」(卷七、一二二、四、一二四、卷十二、三〇三、三二八、八)、「陳」(卷二、一六四)のような訓字表記の例も見られる。そのうち、最も多く見られる訓字表記が「霏霰」である。卷三に一例(四二九)、卷九に一例(二七〇、六)、そして卷十に五例(一八一、二、一八一、四、一八一、七)を数える。この「霏霰」については、山田孝雄氏の『萬葉集講義』以降、しばしば議論されているが、なお疑問点が残る。

まずは文字表記の問題である。漢語「霏微」と「霏霰」の関係について、現在一般的に認められているのは小島

隋 源 遠

憲之氏の人麻呂創造説(後述)である。しかし古典籍のデータベース化が進んだ今、新たに見出された用例に照らして氏の説を再検討する必要がある。一方、語義面において、「霏霰」の成立を考える際、漢語「霏微」と和語「たなびく」とにおける外示的な意味の差が障害となっている問題は残されたままである。漢語「霏微」は雨や雪の降る状態を表す語として一般的に認識され、和語「たなびく」の意味と距離がある。「霏微」を「たなびく」と繋げた上代日本の漢籍受容の背景についても、なお検討が必要と考えられる。

本論文では、先学の研究を踏まえた上で、「霏霰」が内包するこの二つの問題を考察し、その成立について考えていきたい。

一 「霏微」と「霏霏」

萬葉歌では、なぜ漢籍で一般的に使用されている「霏微」ではなく「霏霏」で「たなびく」が表記されたのだろうか。これについて、先行論に小島憲之氏の人麻呂創造説が見られる。

特に柿本人麻呂（或は人麻呂歌集）の中には特異な文字がみられ、「霏霏」、「三五月」など漢籍語を採用してゐる。「霏霏」の例は、六朝頃より少しづつ見出される——但し「霏微」に作る——。（中略）この「霏微」は、一般に雨雪露霜などの天然現象のチラチラとふる姿（㊦と降る貌）を形容することばであるが、久方之、天芳山、此夕、霏霏霏、春立下

（一八一二）

古、人之殖兼、杉枝、霏霏霏、春者来良之

（一八一四）

の如く、これを霞タナビクにあて、もとの「霏微」の「微」に雨かむりを付して「霏霏」としたのは（可憐を可憐とした如く）彼の発明であらう。

この人麻呂創造説は多くの『萬葉集』注釈書に採用され、近年の倉住薫氏の論文「万葉集卷第十巻頭歌群考—歌語「霞たなびく」を通して—」においても継承されている。

この人麻呂創造説は、小島氏が漢籍の中から「霏霏」という語を見出し得なかったことから生まれたものと考えられる。しかし今のデータベースを利用すると、古代中国にもその二文字の組み合わせが存在することが判明する。北京図書館が所蔵する北周時代の墓誌銘の拓本「張滿澤妻郝氏墓誌」（南陽張君妻郝夫人誌）に「松楊簾颺、野霧霏霏」という一文が見られる。拓本の影印（図一）を見ると、「霏霏」ははっきりと確認できる。銘文によれば、郝氏が葬られたのは建徳六年（五七七）、『萬葉集』に見られるいづれの「霏霏」よりも古いことは明白である。

図一



ここで留意しておきたいのは、『萬葉集』中の「霏霏」のうち、二例（四二九、一七〇六）が「張滿澤妻郝氏墓誌」と同じく「霧」を描写する用例という点である。この銘文が萬葉歌の直接の典拠である可能性は低いが、墓誌銘において使用される「松楊簾颺、野霧霏霏」を一種の常套表現と考えれば、上代日本の知識人が、中国の文献から「霧霏霏」という表現を知り、『萬葉集』に転用した可能性

も浮上してくるであろう。

なお刊本における「霏霰」の最古例は、南宋刊『南嶽総勝集』巻中「天柱禪寺」の「福巖直上看_二天柱_一、樓殿霏霰倚_二翠空_一」(図二)である。漢籍刊本の上限定である宋本に「霏霰」の例が存在することの意義も看過できない。おそらく「霏霰」という書き方は北周から南宋までの間にも存在していたと考えられる。

図二
樓殿霏霰倚翠空

では、この「霏霰」と、漢籍により多く見られる「霏微」との関係はどのようなものだろうか。『文淵閣四庫全書』(以降『四庫全書』と略す)中の用例からは、両者が併用されていることが確認できる。

『四庫全書』に見られる「霏霰」の最も古い例は蘇轍の別集『栞城集』にある。

繁雲覆_二庭廡_一、落勢一何勻。
霏霰本無_レ着、積暈巧相因。

「雪中呈_二範景仁侍郎_一」(『栞城集』巻六)
これは舞い落ちる雪の様子を描写する例で、「霏霰」の

一聯は「細やかに降る雪はもとより(どのように積み重ねていくかという)策略を持ってないのに、お互いに支え合(漏れるところなく均等に)積み重なる様子は実に巧みである」と詠んでいる。そのうえ同集巻十「南康阻_レ風遊_二東寺_一」に「霏微雪陣散、顛倒玉山舞」という用例も見られ、雪の降る様子を「霏微」で表している。語用の面から見て、蘇轍が「霏微」と「霏霰」を使い分けているとは考え難く、両者は併用されていると見た方が自然である。なおこの『栞城集』は校本が出版されているが、それによる限り「雪中呈_二範景仁侍郎_一」詩の「霏霰」に諸本間の異同は見られない。

次に「霏霰」が見られるのは南宋薛季宣の別集で、合計二例がある。

霏霰雨霧之飄散、晃朗白虹之下墜。
「雁蕩山賦」(『浪語集』巻三)
霏霰散_二秋毫_一、虚簷水鳴_レ琴。

「春雨」(『浪語集』巻六)
「雁蕩山賦」に見られる「霏霰」は霧雨の様子を表すことばである。「春雨」の「霏霰散_二秋毫_一」とは春雨の細やかに降る様子を「秋毫」で喩えたものである。そして同集巻五「寒食二首(その二)」に「無_レ堪_二一百五_一、春雨作_二霏微_一」とあるように、『浪語集』においても「霏霰」と「霏

微」とが併用されている。

その次に、南宋陽枋の別集『字溪集』巻十二に一例の「霏微」が見られるが、同集巻九には「霏微」の例が見出される。いずれも雨の様子を表す用例である。

元代になっても同じ現象が続く。方回の別集『桐江続集』に雨の状態を表す「霏微」の例があり、そして同集に同じ意味で用いられる「霏微」が四例見られる。

結局のところ、どの別集からも「霏微」と「霏微」とが別々のことばとして使用されている例は見出だせない。

「霏微」は「霏微」の異表記として存在していることは明らかである。

更に注目されるのは『四庫全書』に見られる、「霏」という文字の使用傾向である。合計二十一例のうち、九例が小学書のもの⁹⁾、残る十二例の中に二例の重出があり、実質的には合計十例の「霏」が現存する。そのうち、「霏微」の用例が八例、残る二例は南宋薛季宣「春霖賦」の「仰二横空之霏黴一兮、日霏霏余靡^レ樂」(『浪語集』巻一)と、清陸棻「喜雨賦」の「始而霏霏、佐以霏霏」(『皇清文頌』巻四十四)である。「春霖賦」に見られる「飛微」は、後述のように「飛」と「非」との字形の繋がりを踏まえた「霏微」の異表記と思われる。唐無名氏「海上孤槎賦」(『文苑英華』巻一四四)に見られる「春風驟入、花飛微而

雪下」の異文注記「一作^二霏微」がその証左となる。陸棻の例は唯一の特殊例だが、駢文の上下句に「霏」と「霏微」とがそれぞれ存在していることからみれば、おそらく「霏微」と「霏微」とは「霏微」からの造語であろう。この結果が示すように、漢籍において、「霏」は「霏微」という語に依存する自立しない文字である。小学書の中には「霏」を「微」の異体字として扱うものが多いが、『四庫全書』に「霏微」の例は見出されず、また「霏」の用例中に「微」という異本注記を持つものも見当たらない。実際の用例を見れば、「霏」は「霏微」の異表記としての「霏微」にのみ依存する漢字である。もし人麻呂時代の日本知識人が「霏」という漢字の用例を知っていたとすれば、それは「霏微」以外には考えられないのである。

この「霏微」と「霏微」との関係は、古代漢語学の中では「偏旁類化」と称される。「偏旁類化」について、碑刻文献研究の立場から毛遠明氏は次のように解説している。いわゆる偏旁類化とは、文字が使用されている具体的な文脈の影響をうけて類推の慣性思考が作用し、非理性的偏旁の類推が行われ、その結果漢字の基本性質に背く字体変化が発生し、文字の字形と使用されている熟語との間に存在する合理的対応関係を変化させたことをいう¹⁰⁾。

氏の偏旁類化の分類法によれば、「霏霰」は「前の文字の字形の影響を受け、後の文字に前の文字の偏旁が加えられた」類に入る。氏は例として、「鉅鹿」の偏旁類化である、後漢「尹宙墓碑」の「鉅鑣」をあげている。「霏霰」も「霏微」の「霏」の影響を受け、「微」に雨冠が加えられて生まれた語とみられる。この二語の関連については、早く山田孝雄氏に「本来下字は「微」字なるを上字に倣ひて雨を冠して「霏」とせしにあらざるか」という推論が見られる。毛氏によれば、この偏旁類化現象は六朝において急に増加し、現存の拓本の中から多くの用例が見出せるという。この説に鑑みれば「霏霰」が北周の墓誌拓本中に見出されたのも決して偶然ではなかったと言えよう。前掲の「張滿澤妻郝氏墓誌」に対する毛遠明氏の注釈では、「霏霰」の偏旁類化に関する言及はないが、先述した「霏霰」にのみ依存するという字の性格からも、「霏」は偏旁類化により生まれた文字と判断できる。

同様のテキストを一度に大量生産できる刊本と違い、写本は一人一人の書写者の好みや思い込みにより左右されやすい。六朝時代の碑文の拓本に多くの偏旁類化現象が見られる背景には、そういった写本文化の影響がある。そして人麻呂時代の漢籍受容もまたこの写本文化の系統の中にある。このいわゆる唐写本系統の漢籍を介して、「霏霰」を含む

様々な偏旁類化字が日本に伝来したと推測される。前掲小島憲之氏論の中であげられた、もう一つの人麻呂創造語とされる「忼忼」もその例である。「忼忼」は「可忼」の偏旁類化で、毛氏の分類では「後の文字の字形の影響を受け、前の文字に後の文字の偏旁が加えられた」類に入る。「忼忼」は敦煌写本中に見られ、これもまた人麻呂の創造というよりは、漢籍に学んだ表現である蓋然性が高い。現代の我々が触れている漢籍のほとんどは宋刊本以降のものであるため、文字の校訂がかなり進められている。幸い僅かながら残された写本と拓本を介して、唐や六朝時代に存在していた、多彩多様な偏旁類化現象を垣間見ることができる。その点から見ても、『萬葉集』に見られる「霏霰」や「忼忼」も、写本文化の中で盛んであった偏旁類化の面貌を伝える貴重な遺例と言えよう。

以上で述べたように、「霏霰」は、人麻呂の創造ではなく、「霏微」の偏旁類化で生まれた語とみられる。人麻呂時代の日本において、そのことばが入った漢籍（ただし特定はできない）が知識人の目に入り、「たなびく」の表記として選択されたと考えられる。

二 訓字としての「霏」の語性

古代日本における漢語「霏微」の受容の文献的背景は、

既に小島憲之氏によって指摘されている。¹⁸⁾ 人麻呂時代の日本人が目にするのが可能であった『藝文類聚』の中に、六朝の作例が三つほど収録されている。

霜霏微而初被、野空籠而始彫。

任昉「王貴嬪哀策文」(卷十五・后妃)

散漫輕煙轉、霏微商雲散。

王僧孺「侍宴詩」(卷三十九・燕會)

鮮雲變隼、暫掩晨離。甘雨霏微、猶藏宿霧。

蕭繹「謝勅送齊王瑞像還啓」(卷七十七・寺碑)

また『文苑英華』に何遜作とされる「七召」(卷三二二)には「雨散漫以霏服、雲霏微而襲字」という例が見られる。¹⁹⁾ 「霏微」は唐代以降、多くは雨や雪の状態を形容する言葉として使用されるが、六朝の例を見ると、決して雨、雪に偏っていないことが分かる。

また平安初期の訓点資料の中に「霏微」を「たなびく」と読む実例があることも、大坪併治氏によって指摘されている。²⁰⁾ 即ち唐一行『大毗盧遮那経義釈』の「猶如九重(の)月輪のごとく作(れ)之。作(る)こと如霏微(フイマイ)白(き)雲霧(の)状(の)のごとく(して)而住(せよ)其(の)中(に)」の「霏微」に対する、平安初期点と推定される右傍訓「太奈比久」である。小島氏はこの例をあげて「気象現象の「雲霧」に続く「霏微」は、日本ならば「タナビク」と訓

むのが一般である」とし、「霞霏微」に「かすみたなびく」と訓まれる正当性があると結論づけた。²¹⁾

しかし従来の研究者を悩ませたのはこの二つの言葉の間にある語義の差である。『大漢和辞典』における「霏微」の解釈と、『日本国語大辞典(第二版)』における「たなびく」の解釈とを見ると、前者は「雨雪などの細やかに降るさま」、²²⁾ 後者は「雲や霞などが薄く層をなして横に長く引く」とある。これによれば両者は同義語、類義語というには程遠い。これは吉川幸次郎氏が「たなびく」を「霏微」の原義ではなく、古代日本人による「拡張解釈」とした理由であり、²³⁾ 小島憲之氏の「再考」を生んだ要因の一つでもある。²⁴⁾ 小島憲之氏は日中両国の古代から近世までの「霏微」の例を博搜して、煙雲と結びつくいくつかの例を見出した。そして漢文学における「霏微」は煙雲のような景物を表す語でもあるので、「霞霏微」は人麻呂時代の日本人から見ても合理性がある、という考えを示した。²⁵⁾ この小島氏の説の正確性を裏付けるのは中国側の辞書である。二〇一〇年に完成した『漢語大詞典訂補』の「霏微」の四番目の語釈「迷蒙」には、氏が注目した王僧孺の「散漫輕煙轉、霏微商雲散」が用例に加えられた。²⁶⁾ 「迷蒙」はほんやりとするさまを表すことばで、視覚的特徴においては「たなびく」に近いと言える。なお『萬葉集』の中でも、三例の

「たなびく」が「蒙」で表記されていることは本稿冒頭に触れた通りである。小島氏が追い求めた、雲気類の景物を表す「霏微」の正当性が、辞書の中でも認められたのである。

当然ながら、古代の日本人は現代の辞書を見ることができない。当時日本に伝わった漢籍の中に、「霏微」と「たなびく」とを結ぶ手がかりがないのか、改めて検討する必要がある。

「霏微」の「微」については前述のとおり、「霏微」の偏旁類化で生まれた、自立しない文字である。小学書の中では「小雨」(「類篇」)、「集韻」などと解釈されることがあるが、「たなびく」の語義と合わないもので、「霏微」の成立との直接なかわりはないと見られる。したがって上代日本の知識人にとって、漢語「霏微」を理解する要は「霏」にあると考えられる。

小学書の「霏」の訓詁を調べると、『説文解字』(新附を除く)にはなく、現存する原本系『玉篇』にもないが、宋本『玉篇』に「雨雪兒」と見える。『篆隸万象名義』には「雨雪兒」と見えるが、恐らく「雨雪兒」の誤写であろう。「広韻」、「龍龕手鑑」では「雪兒」、「類篇」、「集韻」では「霏也」となっている。「霏」は「雪貌」(「類篇」)という意味なので、『広韻』、『龍龕手鑑』と『類篇』、『集韻』と

の解釈は一致することになる。これらの小学書はすべて人麻呂時代以降に成立したものが、中国古代小学研究の血脈を引き継ぐものである。その中に「たなびく」に近い意味の訓詁が見られないことは、それ以前の小学書に「たなびく」を連想させるような訓詁が存在する可能性が低いことを意味する。したがって「霏微」という訓の成立と、小学書における「霏」の訓詁との関係は薄いと考えられる。

では古注釈に関してはどうか。 「霏」の用例中、雲気類の景物を表す例としては、『楚辞』「九章・涉江」の「霰雪紛其無垠兮、雲霏霏而承_レ字」が最古のものである。「涉江」の「雲霏霏」に関して、上代の日本人でも目にすることが可能な王逸注には「雲以象_二佞人_一、(中略)雲霏霏而承_レ字者、佞人並進滿_二朝廷_一也」と見える。つまり雲は佞人の喩えであり、その佞人達がごぞつて出世し、朝廷に満ち溢れる様子を「霏霏」で表しているという。同様の例は「楚辞」の「九歎・遠逝」にもあり、ここでは「雪雰雰而薄_レ木兮、雲霏霏而隕集」となっている。このように「霏霏」は、「霏」の用語の中で、もっとも早く煙雲類の景物と結びつく例である。なお「九章・涉江」は『文選』(卷三十三)にも収められている。

こうした例から、人麻呂時代の日本の知識人にとって、雲気の動きを表す「霏」の用法は既知のものであったと考

えてよからう。

注目されるのは謝靈運「石壁精舍還湖中作」(『文選』卷二十二)の「林壑斂暝色」、雲霞収夕霏」に対する李善注「霏、雲飛貌」である。なるほど、確かに日本語において、「ちらつく」や「降る」といった表現は「くも」、「かすみ」、「きり」には使えないが、漢語の中で「飛」は「雨」、「雪」、「雲」、「霞」、「霜」、「霧」のどれとも組み合わせてられる動詞である。例としては、

扇飛雲、拂輕霄。

左思「蜀都賦」(『文選』卷四)

飛霜迎節、高風送秋。

張協「七命」(『文選』卷三十五)

回軒被陵闕、高台眺飛霞。

謝混「遊西池」(『文選』卷二十二)

飛雨灑朝蘭、輕露棲叢菊。

張協「雜詩」(『文選』卷二十九)

寒沙四面平、飛雪千里驚。

范雲「倣古」(『文選』卷三十一)

輕裾隨風、飛霧流烟。

張翰「周小史」(『藝文類聚』卷三十三)

などがあげられる。漢字「飛」は本来生き物が羽ばたく様を表す文字だが、転じて空中にある様々な物の動きを表す

こととなり、その動詞としての汎用性は高い。この「飛」を介して「霏」が「雨」、「雪」、「煙」、「霜」などと繋がったのである。

霏雪写其根、霏霜封其條。

張協「七命」(『文選』卷三十五)

駱駝縱橫、煙霏雨散。

劉峻「広絶交論」(『文選』卷五十五)

霏雲起兮汎濫、雨霽昏而不消。

劉駿「離合詩」(『藝文類聚』卷五十六)

霏雪潤其綠蕤、商風埋其勁條。

周祇「枇杷賦」(『藝文類聚』卷八十七)

なお「霏」と「霞」との組み合わせは、唐代の墓誌銘の拓本の中に用例がある。高宗龍朔三年「大唐濟度寺大比丘尼墓誌銘」の「雲吐荊台、霞霏洛渚」や玄宗開元九年「貝兵參軍張思道墓誌」の「河霧斂、黃石霞霏」などである。

そして「霏」と「飛」との関連性は、文字の成立からも検証できる。「霏」は典型的な形声字で、雨冠は形、「非」は声を表している。しかし形声字の声部分は声だけでなく、意味を表すことも多々ある。「非」は『説文解字』に「非、違也。从三飛下被一、取三其相背」とみえ、それによると「非(非)」は「飛(飛)」の下半分にある二つのハネ

〔下披〕を象徴するパーツを切りとって作った文字で、その二つのハネが相背く姿から、「違い」という意味が生まれたという。篆書のつくりを見ると両者の関係は一目瞭然で、『説文解字』によれば、「非」は「飛」から生まれた文字である。ここで注目されるのは、宋本『玉篇』を始め、『類篇』、『広韻』、『集韻』、『龍龕手鑑』などの小学書があげる、「霏」の異体字「霏」の存在である。この異体字の存在も、「非」と「飛」との字形の繋がりを示している。原本系『玉篇』にその異体字関係が記されていたかどうかは分からないが、上代日本に将来した別の漢籍の中に、両者の異体字関係を記すものがある。『漢書』揚雄伝所引の「河東賦」に、「雲霏霏而來迎兮、沢滲瀝而降」という一文がある。この「霏霏」について顔師古は「霏、古霏字。霏霏、雲起貌」と注する。上代日本の知識人が『漢書』顔師古注を熟知していたことは、既に小島憲之氏によって指摘されている。このように古代日本の知識人は、将来した漢籍を通じて雲気類の景物を描く「霏」の用例を知り、古注釈や小学書を通じてその意味を理解したと考えられる。

三 「霏霏」の成立

『萬葉集』における「霏霏」は、雲気類の景物を描く漢字「霏」に対する日本側の理解を土台に成立したものと見

られる。

前述のように、漢字「飛」は汎用性の高い動詞で、空にある様々な物の動きを表すことができる。「たなびく」の中国語訳は「飄忽、繚繞、拖長、礙礙」などがあるが、そのいずれも「飛」の様子を具体的に表すことばとして受け取れる。漢字の性質から見て、「雲飛貌」を表す「霏」は「霞」や「霧」が「たなびく」動きを表す訓字として、充的な論理性を持つと言える。一方、前掲の顔師古注に見られる漢字「起」には「発生する」という意味があり、嵇含「悦晴詩」(『藝文類聚』卷二)の「勁風埽巽林」、玄雲起「重基」や、温子昇「春日臨池詩」(『藝文類聚』卷九)の「光風動春樹」、丹霞起「暮陰」に見られる「起」は、いずれも雲霞が発生する様子を表す動詞である。そして『萬葉集』における「たなびく」の用例の中にも、「発生する」という意味合いを持つものがある。「霏霏」の例をあげると、「ひさかたの天の香具山この夕霞霏霏春立つらしも」(巻十、一八一二)、「玉かざる夕さり来れば獵人の弓月が岳に霞霏霏」(巻十、一八一六)がそれである。両首はいずれも夕べになると、かすみが目視されることを詠んでいる。もともと目視できない「かすみ」が夕べになると確認できるようになったことを、「霏霏」で表している。置韻語「霏霏」を介して、春の徴であるかすみを賞美する

歌人の姿勢が鮮明に浮かび上がる。このように、「雲起貌」、
「雲飛貌」を念頭に置いて「霏霰」^{たなびく}の使用を吟味すると、
その訓字としての合理性は自ずと見えてくるのである。

ではなぜ「霏霰」を「たなびく」に宛てたのだろうか。
文学性の高い畳韻語という理由のほかに、「霏」という文
字に対する日本側の理解も関係していると考えられる。
「霏」の最古の用例は『毛詩』にある。「邶風・北風」の
「北風其喑、雨雪其霏」と「小雅・采芣」の「昔我往矣、
楊柳依依。今我来思、雨雪霏霏」である。前者について
「霏、甚克」、後者について「霏霏、甚也」という鄭玄注が
ある。さらに『楚辞』「九思・怨上」の「雷霆兮破礎、電
霰兮霏霏」に対して、「霏霏、集貌」という『楚辞章句』
注が残っている。このように、漢籍における「霏」もしく
は「霏霏」には、「甚」、「集」といった数量の多さ、動き
の激しさを表すニュアンスが含まれている。それはうつつ
らと広がる雲気を表す「たなびく」とは相容れないもので
ある。しかし「霏」を「細也、少也」(『広韻』)という意
味を持つ「微」と組み合わせると、この種のニュアンスが
薄らいでいく。「微」がもつこの効果には他にも「微雨」、
「微風」、「翠微」などの例があげられる。王僧孺の例をも
う一度みてみよう。「散漫輕煙轉、霏微商雲散」。ゆつくり
と漂う「輕煙」と、ぼんやりと広がる「商雲」があるのみ

で、「甚也」、「集貌」といった「霏霏」が持つニュアンス
が読み取れない。『大漢和辞典』に見られる「雨雪などの
細やかに降るさま」という「霏微」の語釈も、「微」が持
つ「細也、少也」という意味を活かしたものと考えられる。
そして漢字「霏」の字形を理解すれば、訓字として「霏
微」ではなく「霏霰」を採った理由もまた理解できる。
「霏」が「霏」に由来することは前述の通りである。その
「霏」は「雨」、「雪」、「雲」、「霧」、「霞」などの雨部に属
する景物の「飛」の動きを表すために作られた文字で、そ
の構造は「雨冠+飛」である。同じことを「微」に適用す
れば、生まれる文字は他ならぬ「霰」である。この論理か
ら言えば、「霏微」よりも「霏霰」の方が適切な表記と言
えよう。

「霏霰」の使用は、「霏」に対する理解がその基礎にある。
古代日本の知識人は漢籍を通じて「雲飛貌」、「雲起貌」を
意味する漢字「霏」の意味を理解し、その上で漢籍の用例
から「たなびく」の意味合いを感じ取ったのではないだろ
うか。それを最初に気づいたのが萬葉歌の作者なのか、そ
れとも漢籍に詳しい別の日本の知識人なのか、今それを知
ることはできない。しかしこれまで述べたように「霏霰」
という訓は必ずしも吉川幸次郎氏が感じたような、日本に
おける漢語「霏微」の拡張解釈から生まれたものではなく、

人麻呂時代に將來した文献に含まれる情報を熟知している日本人であれば、合理的に編み出せる表記である。「霏微」と「たなびく」とが後の日中文学史の中でそれぞれ独自の発展を遂げたため、今の我々がもつ両者のイメージが乖離していったのである。しかし人麻呂時代の日本の知識人から見て、「雲飛貌」、「雲起貌」という訓詁を持つ「霏」によって構成される「霏微（霏微）」という漢語が、「霏微商雲散」や「野霧霏微」といった煙雲類の景物の様子を表す言葉として使用される場合、それを「たなびく」と訓むことは、さほどの困難なく理解できたはずである。

『萬葉集』の中で、「かすみ」、「きり」、「くも」の様子を表す動詞は限られている。そのため、「たなびく」はそれらの景物の様々な動きや状態を表さなければならぬ。「陳」、「蒙」、「被」といった「たなびく」の訓字の多様性は、その語義の多彩性をよく示している。「霏微」もまた、このような事情の中で選ばれたのではないだろうか。そしてあえてわかりやすい一文字の動詞ではなく、やや難解である「霏微」を選んだのは、そのことが持つ詩語としての豊韻語の特質をも考慮した結果と思われる。

最後に、小島憲之氏が博搜しても得られなかった、漢籍における「霏霏微」の例について触れておきたい。今回の調査で『文選』李善注の中に、それと関連する例が一つ存

在することが分かった。卷十三所収潘岳「秋興賦」の「天晃朗以彌高兮、日悠陽而浸微」という一句に対する李善注に、杜篤「弔王子比干」の「霏霏尾而四除、言晃朗而高明」が引用されている。「尾」は『説文解字』に「尾、微也」と見え、原本系『玉篇』にも「𩇑」の注文中に「字書、或尾字也。尾、微也」と同様の記述が見える。「尾」と「微」との通用例については『故訓匯纂』に詳しいが、一例として『經典釈文』「莊子音義下」の「尾生」に対する「一本作『微生』」という注があげられる。両字の通用関係から、この「霏霏尾」は「霏霏微」と考えられよう。もともと「霏霏尾」の例は現状この一例しか見出だせず、それを介して、「霏霏微」が創出されたと言うには根拠が不十分というほかない。またこの問題を考える際、和語「かすみ」と漢語「霞」とにおける語義の差にも留意しなければならぬ。⁽³³⁾ここではひとまず「霏霏尾」の存在を示し、後考を俟つこととしたい。

終わりに

「霏微」が『萬葉集』中で最初に現れるのは、卷三人麻呂の出雲娘子火葬歌（四二九）であるが、目を惹くのはやはり卷十・春雑歌の冒頭を飾る人麻呂歌集歌のかすみ歌群の用例である。一八一二から一八一八の七首の人麻呂歌集

歌のうち、五首に「霞霏霏」という表記が見られる。

ひさかたの天の香具山この夕霞霏霏春立つらしも

(一八二二)

古の人の植多けむ杉が枝に霞霏霏春は来ぬらし

(一八一四)

児らが手を巻向山に春されば木の葉凌ぎて霞霏霏

(一八一五)

玉かぎる夕さり来れば狐人の弓月が岳に霞霏霏

(一八一六)

今朝行きて明日は来むと云子鹿丹朝妻山に霞霏霏

(一八一七)

この一群の歌は自然の風景を主眼とする季節詠の原点で、古代和歌の立春歌、始春歌のもつとも代表的な主題である「春の暁としての霞」の嚆矢にあたるものである。春の到来を示すかすみの発生は「霏」に内包される「雲起貌」の訓詁と合致し、その広がり漂う姿は「霏」が持つ「雲飛貌」の訓詁とも合致する。さらにそのゆっくりとした動きと、うつつらとした外見は「微(霏)」が持つ漢字の意味と通じている。また「霏霏」が持つ疊韻語の文学性はもちろん、「霞霏霏」という雨冠を持つ画数の多い漢字三文字を並べることで、視覚的な美感を喚起し、目を惹く効果も期待される。こうして日本の春の到来を象徴する「かす

み」という景色は、和語「たなびく」を漢語「霏霏」で表記することによって、見事に描き出されたのである。

注

- (1) 山田孝雄氏『萬葉集講義 三』(宝文館、一九三七)。
- (2) 小島憲之氏『上代日本文学与中国文学(中)』(塙書房、一九六四)八〇七〜八〇八ページ。
- (3) 小島氏の入麻呂創造説を採った注釈書は西宮一民氏『萬葉集全注 卷第三』、阿蘇瑞枝氏『萬葉集全注 卷第十』、伊藤博氏『萬葉集釈注』、佐竹昭広氏(ほか)『新日本古典文学大系 萬葉集』、多田一臣氏『萬葉集全解』、稲岡耕二氏『和歌文学大系 萬葉集』、阿蘇瑞枝氏『萬葉集全歌講義』、佐竹昭広氏(ほか)『岩波文庫 萬葉集』などがある。
- (4) 倉住薫氏『柿本人麻呂―ことばとこころの探求』(笠間書院、二〇一一)第二部第二章。
- (5) 北京図書館金石組編『北京図書館蔵中国歴代石刻拓本匯編』第八冊(中州古籍出版社、一九八九)一六七ページ。
- (6) 中華再造善本数据库 (<http://zrdpress.com/>)。
- (7) 『文淵閣四庫全書電子版』迪志文化出版有限公司。
- (8) 曾棗莊氏、馬德富氏校『栞城集』(上海古籍出版社、一九八七)。
- (9) 「霏」が検出された小学書は以下のとおり、『類篇』、

『龍龕手鑑』、『六書統』、『康熙字典』(二例)、『集韻』

(二例)、『五音集韻』、『古今韻会举要』。

- (10) 毛遠明氏「汉字形旁类推化研究」(『西南大学学报』(人文社会科学版)、二〇〇六年第六号) 中国語の原文は次の通りである。「所謂偏旁类推化、就是指文字受具体使用环境的影响、在类推心理作用下、产生的非理性偏旁类推、出现与汉字的基本性质相悖的形体改变、使得文字字形与该字原先所记录的词之间的合理对应关系发生变化」。

- (11) 同前毛氏論文、原文は「因受前字形旁影响而添加偏旁」。

- (12) 注十毛氏論文、「尹宙墓碑」の拓本の影印は、北京図書館金石組編『北京図書館藏中国歴代石刻拓本匯編』第一冊(中州古籍出版社、一九八九)による。

- (13) 注(1)に同じ、八二四ページ。

- (14) 注(10) 毛氏論文。

- (15) 毛明遠氏『漢魏六朝碑刻校注』(線装書局、二〇〇八)。

- (16) 注(10) 毛氏論文、原文は「因受后字影响而改换偏旁」。

- (17) 「百鳥名」(S三八三五)に「可怜喜」とある。なお「可怜許」とする異本(S五七五二)もある。また、無

刊記本『遊仙窟』の中にも用例がある。

- (18) 小島憲之氏「暮年三省―「霏微」再考―」(『美夫君志』二六、一九八二)。

- (19) 同例は『昭明太子集』にも見られる。

- (20) 大坪併治氏「阿形本『大毘盧遮那經義釈』の訓点注」

(『大谷女子大國文』九、一九七九)。

- (21) 注(18)に同じ。

- (22) 諸橋轍次氏『大漢和辞典(修訂第二版)』(大修館、一九九〇)。

- (23) 日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編『日本国語大辞典(第二版)』(小学館、二〇〇〇) (二〇〇二)。

- (24) 注(18)の小島氏の論文の中で、「たなびく」に対する吉川幸次郎氏の考えが次のように記録されている。「気象現象として軽いものが長く伸びているのが日本語の「たなびく」でしょうが、漢語としての「霏微」に私の持つイメージは少しちがう。ぼつぼつとおぼるな点をなして存在しているのであって、必ずしも連続ではない。雨はそうでしょう。雲もそう言い得るはずで。霜は一層そうです。「霏微」は連なる中国の用例は、まず「雨霏微」でしょう。しかし雨は「たなびく」と言いますかね。その辺からいえば、「たなびく」に「霏微」という字をあてたのは拡張解釈ということになりますね」。

- (25) 注(18)に同じ。

- (26) 注(18)に同じ。

- (27) 漢語大詞典編纂処編『漢語大詞典訂補』(上海辞書出版社、二〇一〇)。

- (28) 『中国歴代石刻史料匯編』(北京書同文數字文化技術有限公司、二〇〇四)。

- (29) 小島憲之氏『上代日本文学与中国文学(上)』(搞書房、一九六二)第三編第三章。

- (30) 上海譯文出版社編訳『日漢大辞典』(上海譯文出版社、

一九九五年)。

(31) この点にかかわって、『萬葉集』の「春の徴としての霞」歌の表現性については、後に略述するが、続稿を準備している。

(32) 宗福邦氏編『故訓匯纂』(商務印書館、二〇〇三)。

(33) 漢語「霞」と和語「かすみ」との差異について、小島憲之氏「上代に於ける詩と歌―「霞」と「霞」をめぐって―」(松田好夫先生追悼論文集 万葉学論叢) 続群書類従完成会刊、一九九〇)、鄧慶真氏「漢字「霞」の古代日本での受容―『萬葉集』と漢籍との比較研究を通して」(『皇学館論叢』三三二―二、二〇〇〇)などの先行論が見られる。この問題に関しては「春の徴としての霞」を考察する続稿の中で詳論したいと考える。

(34) 同時代に持統御製の「春過ぎて夏来るらし白たへの衣干したり天の香具山」(巻一、二八)もあるが、その季節感の主眼は「衣干したり」という人事であり、「かすみ」を主眼とする人麻呂歌とは異なる。

『上代文学』投稿規程

- 1 投稿者は会員に限る。
- 2 投稿論文は原則として縦書きとし、分量は四百字詰め原稿用紙四十枚以内(注をも含む)とする。
- 3 ワープロ原稿の場合はソフト名を明記の上、設定は原則として縦書き、一行四十字とし、分量は四百行以内(注・図表を含む)とする。なお、本文と注のフォントサイズは十・五ポイント以上とし、行間は十六ポイント以上とする。
- 4 投稿論文は、原本を手許におき、コピー五部を送る。投稿論文の表紙には、投稿者の住所および勤務先(学生の場合は大学名、学部学科名または大学院課程名、学年)を記載する。氏名にはその読みをかなで書き加える。
- 5 投稿論文の送り先は事務局とする。
- 6 投稿論文の締切は、六月十五日、十一月三十日の年二度とする。
- 7 投稿論文に対しては、部分的修正を要求する場合があります。
- 8 投稿論文の採否は、編集委員会の議を経て常任理事会で決定し、その結果を通知する。
- 9 投稿論文(コピー五部)は返却しない。
- 10 『上代文学』に掲載された論文等の著作権は執筆者に帰属する。ただし、発行から五年を経過した分については、特に申し出がない限り、上代文学会の責任において順次電子化公開する。
- 11 翻刻・影印などを含む論文等については、『上代文学』への投稿に際し予め所蔵者から電子化公開の許可を得ておくこと。許可が得られない場合も投稿を妨げないが、その旨を原稿の末尾に明記するとともに、非公開とする箇所を明示すること。
- 12